

NO. 57
October '14

Newsletters

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

STAP細胞を巡って

高岡素子

2014年1月末に理化学研究所が発表した『STAP細胞（多能性獲得細胞）』の研究成果は、メディアにも大々的に取り上げられ、世界的な発見として注目を集めました。その作成は細胞に弱酸性の刺激を与えるだけの格段に容易な方法であることに驚愕したことを覚えています。若い研究者の発想の転換がこの大発見を生み、新しい科学の扉が開かれたと感動しました。

一方、テレビ報道を始め日本のメディアの多くはその発見の科学的側面だけでなく、別の側面、STAP細胞研究のリーダーである小保方晴子さんが若く、美しく、そして女性であることに注目しました。彼女のファッションや研究室の装飾などについての連日の報道に対し、私は強い違和感を覚えました。これが日本の現状であり、研究成果以外の部分ばかりに注目されている小保方さんが大変気の毒だと思いました。小保方さんの成し遂げたSTAP細胞の研究成果は再生医療への貢献の可能性が大いに期待され、「理系女子の星」としてのこれからの活躍を心から願いました。

しかしその状況は数カ月後には一転します。投稿論文の不正が指摘されたのです。その後は小保方さんだけでなく、共同研究者に対するバッシングが相次ぎ、研究者のプライバシーや、組織の上司や所属機関運営などへの非難が整理されないまま、今も混乱が続いています。

理化学研究所の調査による最終報告は、小保方さんが投稿した論文には悪意のある「捏造」があると認定しました。小保方さんはこの報告に不服申し立てをしましたが、釈明会見での言動、博士論文での不正行為の発覚、稚拙な実験ノートなどが明らかになるにつれ、STAP細胞の存在への確信は揺らぎ、私も小保方さんを擁護する言葉が見つからなくなりました。この分野に詳しい専門家からは「0からの捏造である」という激しい批判も聞かれました。

理工系研究者のキャリアを左右するのは、権威のあるジャーナルに何本投稿しているかという数値基準であり、若手研究者は一秒を争って実験データを生み出し、論文を作成することに多大なエネルギーを注いでいます。私自身のポストドク時代を振り返っても、とにかく結果を出すことだけに追われ、強いプレッシャーとストレスを感じながら、余裕のない毎日を送っていました。

科学の世界では結果が重要であることは言うまでもありませんが、今回の一連の騒動を顧みて、その結果に到るプロセスも無視してはならないことを確認しました。その結果を導き出したプロセスが信頼できるものなら、その結果も信頼されるものになりうる

という意味です。そのプロセスとは、単に「材料および方法」だけを意味するものではありません。科学理論や科学的技法だけではなく、実験ノートの取り方、写真やデータの取り扱い、文献の引用の約束事なども含まれます。論文作成に関する不正行為など「科学リテラシー」について十分に学び、理解することがこのプロセスに含まれていると実感しました。私の経験ではこのような学びは講義で教えられるものではなく、指導教官や上級生の言動や振る舞いに触れることで、自然と身につくものでありました。しかし、近年競争の激しい研究の世界において成果主義にとらわれすぎたあまり、「科学リテラシー」に関する学びが徐々に軽視されてきたのではないかと考えられます。誰もが自分が行った実験結果が素晴らしい発見であることを切望するあまり、自分の不正を許容してしまう異にはまってしまう可能性があるのです。私自身ももう一度「科学リテラシー」に向き合い、学生たちにも時間をかけて丁寧に伝えることの重要性を強く感じています。

STAP細胞研究を巡っては、あまりにも多くのことが言われてきました。研究者のプライバシー、研究者間のデータチェックのあり方、理化学研究所の運営体制、国の補助金の獲得技術、博士論文の学位授与基準、関係者の個人的な資質にいたるまで多岐にわたりました。もしかしたら小保方さんが男性であったなら状況は変わっていたかもしれないと、ふと思うことがあります。小保方さんが若い女性研究者であったがために、研究成果の内容や科学本来の問題や科学のあるべき姿の議論からどんどん遠ざかってしまったのではないかと感じています。

「女性研究者」という言葉が意味するように、わが国では第一線で活躍している「研究者」の大部分は男性です。「女性研究者」という言葉から、「女性」という言葉が除かれる日はいつなのでしょう。

小保方さんが参加するSTAP細胞の検証実験は11月末まで行われます。（人間科学部教授：食品科学）



高岡素子 教授

連続セミナー「母と娘」

【第1回：2014年5月23日】……………文責・横田恵子

● 「摂食障害と母娘関係」 (講演者：生野名誉教授)

2014年度の女性学インスティテュート連続セミナーの第一回は、本学名誉教授、生野照子先生をお迎えして、今や普遍的な思春期問題の様相を呈している摂食障害をテーマにご講演を頂きました。

我が国では1960年代末より注目されるようになった摂食障害ですが、密接な母娘関係と関わる病理であることはたびたび指摘されています。生野先生のご講演は、この認識を共有しつつまずは最新の知見をご紹介いただくところから始まりました。摂食障害は今や誰でもなりうる疾病であるという認識とともに、やせが目立たない過食症や食行動異常の障害が増え、外見や行動では発見しにくい治療が遅れる傾向がある、という点をご指摘いただきました。そしてそれを誘発する社会的要因として、現代社会が女性に要請する矛盾した規範（ボディイメージとそのコントロールや理想の食行動など）があり、それらに翻弄される形で陥って行く病であることも語られました。

次に発症要因についての言及がありました。すなわち一般的に言われるように「親が悪いから子どもが発症した」というような一対一の因果関係が認めうるものではなく、多くの要因が絡まり合って複合的に誘発されるという点の指摘です。そして心理・社会的にさまざまなレベルから被るストレスが食行動と結びついたとき、家族関係を中心に illness network が発動するのです。そのひとつとして母娘関係の問題がありますが、これは根源的な関係でもあり、発症との関係は慎重に見極めなければならないことも強調されました。

密着した母娘関係が病をめぐって先鋭化するとき、その多くは母娘相互の支配従属として現れるといいます。しかしそのマイナス面に治療場面で真摯に向き合うとき、母娘の壮絶な葛藤そのものがそれぞれの自立への道を切り拓くこともあるという事例が示されました。そして最後に、そのような母娘の葛藤を乗り越える過程で描かれた患者さんの画が示され、聴衆は自立への壮絶な道のりを言葉を越えて共有する事が出来た様に思います。

「母と娘が一生懸命紡いで来たもの、その結果としての傷つき」をすべて受け入れ、許す事から始まるそれぞれの自立、そして底に関わる治療者の存在について、深く考える事が出来た感銘深いひと時でした。

(女性学インスティテュート・ディレクター)

【第2回：2014年5月30日】……………國吉知子

● 「母と娘 — その光と闇 —」

母と娘のテーマは古くて新しい。近年では少子化の影響を受け、一卵性母娘など母娘の問題がクローズアップされているが、実は童話や神話の中にも母娘のテーマは繰り返し表現されている。本講座では深層心理学的観点から、母と娘に特有の親密性の高さ（息子とは異なる）娘の自立の困難さについて、神話やディズニー素材を通して考察した。サブタイトルの「光と闇」は「影」では捉えきれない母娘関係の深淵を反映している。また、ディズニー素材はその現代的脚色からオリジナルを正確に伝えているとは言い難い。しかし、元来、童話とは時代や地域性を反映して伝承されてきたものであり、その意味では、ディズニー版もまた「現代の童話」として、今日の現象を読み取るうえで適切であると考えた。

まず共通理解として、渡辺（1997；2004）、藤田・岡本（2010）の、娘の母親への依存性の高さについての実証的研究を概観した。その後、事例として(1)実際の心理事例、(2)神話：デメテルとコレー、(3)ディズニー素材：白雪姫、ラプンツェル、リトルマーメイドⅡ、メリダとおそろしの森、アナと雪の女王を検討し、これらに共通するパターン（光と闇）として、母と娘の結びつきがどのように描かれ、母娘の絆がいかに強く分離しにくいものであるかを具体的に示した。さらに、この現象を理解するために斎藤（2008）を引用し、母親が娘をコントロールする無意識的メカニズムとして、抑圧、同一化という心理機制や「母」役割が持つ献身の問題を、マゾヒスティック・コントロール（高石1997）の観点から論じ、その対処について述べた。

母娘関係には、本来子を守り育てるうえで不可欠の親密性（絆）が、娘（同性であるがゆえに母親を「異質な存在」と捉えにくい境界線を引きにくい）にとり、束縛する真綿となりやすく、また娘側も確信犯的に利用しようという可視化しにくい複雑な問題構造が存在する。従来一般的な自立モデルに加え、女性特有の自立スタイルを検討することが現象理解に役立つであろう。当日は、カウンセリングセンター30周年記念講演会（鷲田清一氏）と重なったこともあり、参加者は少なめであったが受講者（特に女性）はご自身の体験を重ねつつ熱心に聴講して下さったことが印象的であった。（人間科学部教授：臨床心理学）

【第3回：2014年6月6日】……………戸江哲理

●「母たちと娘たちがいる風景：子育て支援の現場から」

私は、子育てひろばと呼ばれる、親（主に母親）が子ども（乳幼児）を連れて集まる場所について調べてきました。そこで、「母と娘」と題した今回の連続セミナーでも、この子育てひろばについてお話ししました。

はじめに、子育てひろばの活動が盛んになり、政府もその活動を支援するようになった社会的な背景について概説しました。続いて、子育てひろばを利用している母親たちへのインタビュー調査にもとづいて、どんな場合に母親たちがグループ化するのか、またとくに誰かと親しくするわけでもなく通い続けている母親たちは子育てひろばから何を得ているのかなどについて、かいつまんでお話ししました。

さて、今回の連続セミナーのチラシで、私は「子どもたちの性別が同じだと、母親どうしが仲良くなりやすいのはなぜか」という謎を提示しました。その答え、つまり私が話を聞いた母親たちの考えは、「子どもの性別が違うと、遊びかたも違うから」というものでした。とくに男の子の場合、女の子が大人しく遊んでいるのを邪魔してしまう（と母親たちは思っている）ので、お互いに気を遣わずに済む男の子の母親どうしが仲良くなりやすいのだそうです。

これは私にとってはひとつの発見だったのですが、読者の皆さんはいかがお感じでしょうか。「そんなの当たり前じゃない！」と思われたかたも多いかもしれません。私は、今回のセミナーでお話ししたことには、この類のことが多かったのではないかと恐れています。何しろ、私のような若輩者が、豊かな子育て経験をおもちの受講生のかたがたを前に、子育ての話をしたわけですから……むしろ、皆さんの感想・意見・質問から、私が学んだことのほうが多かったかもしれないと感じている次第です。そのことにこの場を借りてお礼を申し上げますとともに、至らなかった点についてお詫びしたいと思います。

私は今年度の後期に、子どもの社会学という科目を担当することになっています。今回のセミナーでお話ししたようなことを、今度は受講生の皆さんのお子さん・お孫さん世代の人たちに話すわけです。リアクションの違いはどうかと気になるところです。そして機会があれば、授業のなかで今回のセミナーの様子についても少し話してみようと思っています。

（文学部専任講師：社会学）

【第4回：2014年6月13日】……………高村峰生

●「夜も更けた室内で、母娘の憎悪は燃え上がり
— イングマール・ベルイマンの『秋のソナタ』」

連続セミナーの一回として、イングマール・ベルイマン監督の1978年の映画作品である『秋のソナタ』における母と娘の関係について、具体的に映像資料を使いながら考察を行った。会場にはベルイマンの映画作品に親しみがない方も少なからずいたようだったが、物語の筋は分かりやすいので、映像を順に追ってゆくことでその場で説明していく上で支障はなかった。

この映画は、プロのピアニストである母親のシャルロッテ（イングリッド・バーグマン）が夫を亡くしたばかりの時に、娘エヴァ（リヴ・ウルマン）の家で過ごす一晚を描いた室内劇である。はじめのうち娘は暖かく母の訪問を受け入れ、夫をなくした母の傷心を慰めようとするが、夜が更けていくにつれ二人の間の修復しがたい過去の傷が露出してくる。まず、エヴァは重度の障害を持った妹のヘレーナを自宅に引き取って面倒を見ているのだが、シャルロッテは障害を負った娘と再会することで心を乱される。また、エヴァがシャルロッテの前でショパンを弾く場面では、娘が母に対して長年持ち続けてきた劣等感が出る。二人の決定的な言い争いは、ベッドに戻ろうとする娘を母が呼びとめて「私を愛している？」と聞くところから始まる。娘は、いつも演奏旅行で海外をめぐる家庭を顧みないばかりか彼女の夫に対して不義を働いていた母親を責める。口論は夜のふけた二人きりの部屋で延々と続き、両者の愛憎入り混じった関係がすべて表に出される。

ここで注目されるのは二人の口論を映すカメラワークである。ベルイマンはクローズアップを多用する監督だが、この作品においてもエヴァとシャルロッテの表情を間近に捉えたショットが頻出する。二人の役者は、したがって、細かな表情の変化で心の動きを表現しているのだ。また、二人の顔を半分ずつ重ねあわせるようなショットも存在する。これはその構図によって、母と娘がお互いに憎みあいながらも離れられないことが暗示されているのだ。このように様々な撮影技法は映画の主題を表現するように、効果的に用いられているといえる。

『秋のソナタ』は、ベルイマンの長いキャリアの中で後期の始まるあたりに位置づけられる作品であるが、室内劇という設定と特徴的なカメラワークによって、母と娘の困難な関係を巧みに表現している。

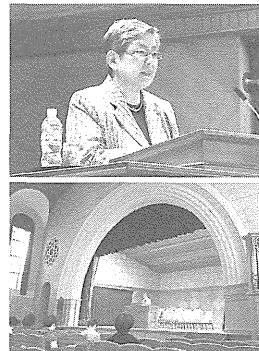
（文学部専任講師：米文学・比較文学）

2014年度 スケジュール

■ 講演会・セミナー（一般・学生対象）

4月	特別講演会 「女性差別撤廃、ジェンダー平等の実現という課題にめぐりあって～わたしの物語～」
	4/25（金） 10:35～11:25 神戸女学院講堂 講演者：特定非営利活動法人 グループみこし 理事長 米田 禮子氏 参加者：70名
5月	連続セミナー「母と娘」(全4回／5月・6月開催) JD-104
	5/23（金） 14:00～15:30 第1回 「摂食障害と母娘関係」 講 師：神戸女学院大学 名誉教授 生野 照子 出席者：一般35名、学生6名 計41名
	5/30（金） 14:00～15:30 第2回 「母と娘 —その光と闇—」 講 師：人間科学部心理・行動科学科 教授 國吉 知子 出席者：一般30名、学生2名 計32名
	6/6（金） 14:00～15:30 第3回 「母たちと娘たちがいる風景：子育て支援の現場から」 講 師：文学部総合文化学科 専任講師 戸江 哲理 出席者：一般30名、学生5名 計35名
	6/13（金） 14:00～15:30 第4回 「夜も更けた室内で、母娘の憎悪は燃え上がり —イングマール・ベルイマンの『秋のソナタ』」 講 師：文学部英文学科 専任講師 高村 峰生 出席者：一般30名、学生6名 計36名
受講者数累計：一般31名、学生8名 計39名 修了証交付：39名	

<4/25 特別講演会>



<5/23 連続セミナー 第1回>



<5/30 連続セミナー 第2回>



<6/6 連続セミナー 第3回>



<6/13 連続セミナー 第4回>



■ 学生対象プログラム

年間	授業 Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」 Cu234(1)(2)「女性学（理論編）」 Cu133(1) 「ジェンダー・スタディーズ（Ⅰ）」
	インターディシプリナリー・プログラム (申請締切：2014年4月23日（水）・2014年10月15日（水）)
7月	第16回「女性学インスティテュート賞」 学生懸賞論文 (締切：2014年7月9日（水）)

■ 発行物

10月	newsletter No.57 発行
3月	newsletter No.58 発行
	『女性学評論』第29号 発行

編集・発行：神戸女学院大学 女性学インスティテュート

女性学インスティテュート委員会：横田恵子(ディレクター)、難波江和英(研究所長)
景山佳代子、金田知子、金山千広、高村峰生／編集事務：藤谷悦子、吉永真理子

〒662-8505 西宮市岡田山4-1 TEL 0798-51-8545 FAX 0798-51-8527

URL <http://www.kobe-c.ac.jp/gender/> e-mail: wsi-o@mail.kobe-c.ac.jp